

立かこひ、屏風をまるくたてたるごとし、瀧の高きこと幾千尋といふ事を考らず、土人水上にのぼり、水分岩の邊より百尋の繩をたれて高程をはかりけるに、瀧の半をすぎず、また百尋までたる、に、其繩瀧の半をすぎざるに、忽風繩をふきあげ、瀧鳴雨降りて考ることを得ず、これ名瀧の故とぞきこへし、またをく山にて材木をきり、此瀧よりをとして大川へながし出す、これ土人の恒の業なり、考かるに其材木毎日瀧へながし落す事そばくなるが、數日をふれども瀧つぼにく、みて、川下へ流れいでざる事あり、土人瀧祭すれば、數多の材木一時に流れいづるとなり、瀧の側に神社あり、轟明神と名づく、

〔蓮歩色葉集〕禮龍門瀧

〔西遊記三〕龍門の瀧

瀧は紀州那智山の瀧天下第一、其次に日光山の裏見のたきといふ、那智のたきは日本のみならず、唐土にても是程の瀧はなきよしなり、其外は中國、九州、四國の間に少しの瀧はあるども、大なる瀧はたへてなし、那智、日光の二ツのたきは、予いまだ見ざれば論ずる事あたはず、只隅州加治木の北に、龍門の瀧と名付るあり、昔唐人加治木の港に入船せし頃、甚此瀧を愛して、常々此所に遊び、唐主の龍門の瀧を見る心地せりとて、此瀧をも龍門の瀧と名付けるとぞ、幅五六間、高さ二十間計とも見へたりしが、其地の人に聞ば、高サ五十間に幅十間ありとぞ、是は只仰山にいふなるべし、然れども誠に見事の瀧にして、數丁の外に響き、予が遊しひときも、晝の八ツ過の事なりしが、瀧の中より虹數十條起り、錦を織れるが如く、殊に見事なり、壺壺尤深し、此中に大なる龜年久敷住るよし、甲のわたり四五尺計なり、此地の人は毎度見る事有りとぞ、予漫遊の間に見たる瀧にては、是を第一とす、然れども格別の邊土なれば、其名をだに考る人なし、おしむべし、其後又肥後國求麻の山中にて、かなめの瀧といふを見たり、龍門の瀧よりは小なれども、又見事の瀧な